ねがいひろがる教育実践

神戸大学
川地亜弥子

かわじ　あやこ／研究テーマはわかる・楽しい・感動のある授業づくり、安心できる集団づくりについて。編著に『実践、楽しんでますか？―発達保障からみた障害児者のライフステージ』（クリエイツかもがわ）など。

第10回　学校のねうち

みなさんにとって、学校とはどんなところでしょう。学びの場、職場、思い出の場（いい思い出、苦い思い出、いろいろありますね…）。三木裕和さんは、「子どもたちにとって、学校はすべての価値が存在する場所です。世界の中心は東京やニューヨークではなく、学校にあります」と言っています。

家庭以外で、しかも頼れる大人と、仲間がいる、かけがえのない場所が学校です。学校を「資質・能力を伸ばすところ」「就職のため、検定突破のための練習をするところ」と割り切ってとらえることは、学校のねうちを切り下げるものではないか、と思います。

養護学校義務制に10年先駆けて1969年に高等部から開校した与謝の海養護学校の設立理念は、「すべての子どもにひとしく教育を保障する学校をつくろう」「学校に子どもを合わせるのでなく、子どもに合った学校をつくろう」「学校づくりは箱づくりではない、民主的な地域づくりである」でした。

現代では、すべての子どもが学校教育を受けられる法制度がある一方、不必要で根拠の乏しいルールが学校や授業にあることで、子どもたちを排除しているのではないかと思います。「学校に行ける時代なのだから、行かないのは自己責任」というのはとても乱暴な議論です。

たいしくんと作文

子どもに合った学校を、と考える時、学校は何よりも子どもの声をきく場所でなくてはなりません。

しかも、学校にとって都合の良い表現だけをとらえるのではなく、どんな声もききとろうとする誠実さが求められます。そのことを学校づくりの中心においたのが、堺市の安井小学校でした。そしてそのきっかけとなったのが、4年生のやんちゃなたいしくんたちでした。

4年生のたいしくん・じゅきやくんたち4人組は、4月から全然教室に入りませんでした。担任の勝村先生は、教室に入らないなら自分から近くに行こうと、彼らがいる廊下や玄関で話したりもしていました。そのなかで、彼らが国語、特に文学は好きだということがわかってきました。たいしくんは読み書きに苦手さがありましたが、廊下でじっと話をきいていたりしたからです。

勝村さんは、5月の連休明け、書く内容も、書く分量も、全部子どもたちが決める自由作文にとりくむことにしました。4人組の一人で、一度もかばんを持ってきたことがなかったじゅきやくんが「ほんまに何を書いてもええんやな。あとでケチつけへんな」と言いました。勝村さんが約束すると、たいしくんが「よっしゃ、そしたら書くわ」と言ったのです。字の読みやすさも、文章の長さもいろいろでしたが、全員が書ききりました。

勝村さんは、その夜、堺国語教育の会という、教師の教育研究サークルに作文を持っていって、担任している子ども全員の作文を読んでもらいました。

ひよことうずら　　たいし

ぼくのひよこは堺祭りでつった、ひよこです。まやとぼくがつったひよこが死んだのです。つぎの日、公園にうめてきたのです。それから、まやのひよこがいなくなったのです。それから、ツバメのすが、ほしいと思ったのです。

この作文を読んだ堺市の元小学校の先生の野名龍二さんは、「エラい悪さやけどかわいいわ！」と言いました。そして、「～のです。～のです」の文体に、この子のプライドがあらわれている、と読みました。行動ではつっぱっているように見えたたいしくんの作文に、プライドとかわいさを読んだのです。

勝村さんは、野名さんの話を聞いて、自分一人で読んでいた時には気づかなかったたいしくんの一面に気づきました。そして、じゅきやくんの言葉から、この子たちはずっと自分たちの言うことやすることにケチをつけられてきたのかもしれない、と気づきました。

お互いの声をききき、みんなで考える学校

たいしくんたちが6年生になる年に、勝村さんは、この学校の教務主任兼作文専科の先生になりました。作文教育といっても、書き方を教えるのではなく、書く内容も、分量も自由な作文です。安井小学校は、学校運営方針の柱の一つに作文教育をおきました。全学年で毎月1回、全員が作文を書きました（ただし、書きたくない子は書かなくてもよく、4月当初は書かない子もいたそうです）。子どもたちが書いた字のまま印刷して文集にし、子どもたちだけでなく学校に来た誰もが読めるようにしました。